

小川 正 著

『「魂なき教育」への挑戦』

(関西大学出版部、2001年10月刊 2,500円)

本書は、小川正先生がこれまで取り組まれてこられた教育学研究のエッセンスとして読むこともできるし、また小川教育学の入門書であるといえるかもしれない。筆者はその研究経歴の前半では、教育現場で展開されているさまざまな教育実践の即しながら、授業創造の研究に従事されてこられた。そして「後半生になると授業研究の実際から離れ、教育実践に関する研究資料や先学の哲学・思想をもとにした理論研究に力点を移し」(本書はじめにより)ここ20年来、研究を継続された。本書に掲載された諸論文は、筆者の前半生の研究とそれ以後の研究とをつなぐものといえ、その意味からも注目すべきものである。本書の内容は「右の一連の研究の前段階に当たる時期に、教育実践の現実に近い位相で追究を試みた研究成果に若干の修正・補筆を加え、最近の教育現実の問題の解決に対する私見を述べた論文を付加したものからなっている」(同) 本書の構成は序論で佐藤学・高橋史郎への批判、第一部「魂の教育」を求めて、では戦後教育理論の展開についての今後の課題、教育実践分析の方法、灰谷健次郎、林竹二、福地構造の子ども観、授業観、教育関係論などをめぐる緒論、第二部「魂の教育をめぐる」では、聖徳太子の仏教観、親鸞の他力思想との関連での三木清、高史明、東井義雄についての論考と、近代の心理学を「魂なき心理学と批判し(そしてこのことばが本書の題名のヒントとなっている)それに対して、生きた人間理解をめざした

正木正についての論考が収められている。そして第三部では筆者のこれからの「魂の教育」の構想が述べられている。

さて、さまざま教育実践家の業績、三木清や西田幾多郎をはじめとする近代日本の哲学的な蓄積、さらに親鸞を中心とした仏教思想と非常に多方面にわたる諸成果を駆使して著された本書に対して、必ずしもその道の専門家でない評者が、軽々しく批評めいたことを書くことはできない。しかしそれでは書評にはならないので、筆者に失礼を承知の上で、本書の読後感を一言だけ述べさせていただくことにする。

本書にもあるように、21世紀も迎え、日本の教育や社会の現実あるいは人類社会全体のとりまく状況はますます混迷を色を深めているといえる。それを生み出したのが近代文明であり、近代の知であり、近代の科学技術であり、この時代のわれわれの歴史的営為であるとすれば、われわれはそこからの救いをどのように見いだすことができるのか、そしてそれに対する糸口をわれわれの先達たちの残してくれた諸成果から学ぶなかで発見することができるのか、われわれに救いはあるのか、本書はこのわれわれの時代に課せられた、われわれが好むと好まざるとの拘わらず向き合うことになる最大の問題に対して、正面から取り組もうとしたものだといえる。その正否については、むしろ本書の読者が、各で見いだすべきことなのであろう。

(山本冬彦)